日本彫刻史基礎資料集成

鎌倉時代 造像銘記篇

第一期全六巻

創業五十周年記念出版

▶毘沙門天像　願成就院

中央公論美術出版

刊行の趣旨

日本彫刻史を研究する上で、もっとも基礎的な資料となるのが造像銘記である。像の一部に直接書き付けられた銘記、あるいは像内納入品やそこに記された文の内容は、その像の造顕理由、発願者、作者、製作の年時や製作の様相などを直接的、具体的に示すものであり、造像事情、信仰内容、作家や流派、編年、様式変遷など、あらゆる彫刻史的研究の基礎をなす資料である。

早く大正十五年に『造像銘記』が考古学会から出版されて以後、多くの像から銘記や納入品が発見され、それらを集成した資料集の刊行が学界から望まれていたが、小社はこの要望にこたえ、創業十周年記念出版として昭和四十一年から『日本彫刻史基礎資料集成』の刊行を始め、まず平安時代造像銘記篇八巻を上梓、続いて文献史料に記載のある当時第一級の基準的な作品を平安時代重要作品篇五巻として集成し、彫刻史研究の発展に寄与するところ大であったと自負している。

これらの編纂にたずさわった研究者に加えて、新たに次の世代の第一線の研究者を編纂者に迎え、今回鎌倉時代造像銘記篇を刊行することとなった。鎌倉時代には造像銘記や納入品を持つ仏像が前代よりもはるかに多くなり、また修理に際してのそれらの発見も相次いでいる。そのうちには個々に紹介され、また修理時の貴重な知見が報告書として刊行されているものもあるが、多年にわたり資料の収集につとめてきた編纂者達によって、その体系的かつ詳細に及ぶ集大成がなされるはずである。

本篇では、銘記及び納入品によって製作年代の明らかな作品、あるいはおよその年代幅を確定できる作品に収録をしぼるが、それでも厖大な数に上る。ここでは鎌倉時代を前後の二期に分け、文治元年（一一八五）から運慶次代を代表する仏師湛慶が歿した康元元年（一二五六）までを第一期とし、まずその六巻の完結をめざす。

平安時代造像銘記篇にならって一巻を「図版」および「解説」の二分冊とし、図版には、銘記・納入品のほか、美術史的研究に必要なできる限り多様な角度からの像の写真を収める。解説には研究上必要な基礎データ（銘記・納入品、像の形状・法量・品質構造・伝来・保存状態）を詳細に記述し、備考欄にそれらに関する考察を述べる。

本篇の刊行は鎌倉時代彫刻史研究の真の基礎を築き、かつ広く美術史・仏教史・文化史等の研究者にも有益であると信じている。

終りにこの長期に及ぶ学術資料の刊行にあたり、各界の御援助と、ことに永年にわたって尊像を護持される寺社等の深い御理解と御支援を冀うものである。

中央公論美術出版

《編纂者》

水野敬三郎　編纂代表者　東京芸術大学名誉教授
井上　正　京都造形芸術大学教授
西川杏太郎　横浜美術短期大学学長
田邉三郎助　武蔵野美術大学名誉教授
副島　弘道　跡見学園女子大学文学部教授
山本　勉　東京国立博物館企画部情報課室長
根立　研介　京都大学大学院文学研究科助教授

《第一巻執筆者》（五十音順）

青木　淳　高知女子大学文化学部助教授
伊東　史朗　文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官
井上　一稔　同志社大学文学部助教授
奥　健夫　文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官
神戸　佳文　兵庫県立歴史博物館学芸課長
鈴木　喜博　文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官
副島　弘道
田邉三郎助
西川杏太郎
西川　新次　慶應義塾大学名誉教授（故人）
根立　研介
長谷　洋一　堺市博物館学芸員
水野敬三郎
三宅　久雄　宮内庁正倉院事務所保存課長
武笠　朗　実践女子大学文学部教授
八尋　和泉　別府大学文学部教授
山本　勉

他

『日本彫刻史基礎資料集成』の原点と継承

東京国立博物館　名誉館員（仏教美術史）　石田尚豊

『日本彫刻史基礎資料集成』の原点は、丸尾彰三郎先生の「調書作成要項」（ガリ版小冊子）にある。西川杏太郎氏が昭和二十六年、文化財保護委員会（後の文化庁美術工芸課、現美術学芸課）の彫刻室に入って早々、丸尾先生から朱筆で修正されたての冊子を渡され、清書を命ぜられたそうだが、私もかつて先生の御宅に伺い、この刷物を戴いた。作品を前にしての調書の取り方が、簡潔ながら必要十二分に記されており、これこそ先生が国宝調査室において、彫刻作品をどのように客観的に叙述するかという努力の集積から、おのずと纏められたものなのであろう。当時の彫刻室は東京国立博物館本館三階にあり、室長の丸尾先生を中心に小林剛先生、少壮有為の倉田文作、西川新次、それに新参の西川杏太郎氏からなる錚々たる陣容であった。その後田邉三郎助氏がこれに加わった。

一方『基礎資料集成』平安時代造像銘記篇の企画が始まるや、丸尾先生、西川新次氏がこれにたずさわり、ほかに当時同委員会工芸室にあった井上正氏、外部から毛利久氏と最年少の水野敬三郎氏が参加した。平安時代重要作品篇では、西川杏太郎、田邉の両氏も加わった。丸尾先生歿後は、先生の学風を継承発展させた西川新次氏が中心となり、東京国立博物館から東京芸術大学美術学部に移った水野敬三郎氏が扶けた。氏は芸大にあってよく後進を第一線の研究者にまで育成した。しかし毛利氏が他界し、西川新次氏も急逝されるに至っては、旧来からの編纂者は井上正、西川杏太郎、田邉三郎助、水野敬三郎の四氏にすぎず、各氏もすべて七十代である。しかるにこのたび鎌倉造像銘記篇を制作するという。造像銘記のある像は鎌倉時代となれば厖大であり、編纂も長期化する。それにもかかわらずこの企画が成り立ち得たのは、経験豊富な四氏が存命中にかなりな程度まで成就するという予測と、幸い水野氏の薫陶を受けた副島弘道、山本勉、文化庁で研鑽を積んだ根立研介の三氏を以て、欠けた編纂者を補充することにより、この企画の次世代への展望が可能になったからである。旧来四氏の一生は、戦後始まった国宝、重要文化財の指定事業に参画し、職掌上多量の優品を精査しえたこと。また文化庁による系統的な地方作品の調査、岩波書店による大刊行事業である奈良六大寺、大和古寺、平等院、醍醐寺等の大観に収載する作品を実査のうえ詳細な解説の作製、デパート展や海外展などの盛行に伴う調査、学術研究費による内外の調査、修理事業促進による調査報告等、空前絶後とも云うべき大事業に遭遇した。それだけに各自の内蔵する貴重な資料が、存命中に『資料集成』に寄与されるところに、この刊行の重要な意義があるのである。それとともに、ここには丸尾先生に始まり、西川新次氏や旧来の四編纂者をへて、水野門下の編纂者に連なる、日本彫刻史学の道統が実現されているところに、深い感銘を覚えるのである。

美術史的認識のみち――日本彫刻史基礎資料集成

九州大学　名誉教授（仏教絵画史）　平田　寛

昭和四十一年（一九六六）夏、『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代造像銘記篇一は公刊されている。六千円であった。奈良の研究所で仏画の勉強をしていた貧書生にとって、月俸の一割をこえる高額であった。この金額はその後数年、買うか買わぬか、図書購入の基準となってしまった。第二冊は翌四十二年の春に出ているが、「異體文字表」が挿入されていて、悲哀と共感とが交々きたった。銘文を読むのは、本当にむづかしい。こうしてはじめの造像銘記篇八冊はいまも、貧書生のなつかしき数々の記憶とともに、わが小さき書架におさまっている。記憶の根底には、一種の学術的感動がのこっている。美術作品の記述はどうあるべきか。

画は無声の詩、文字に書けるのなら絵にはかかぬ。彫刻についても同じであろう。美的感動に発するひとの思いはつねに、文字に書けぬ思い、直観とともに生きて動く。美術作品を前にすれば百人百様たることを、まぬかれえまい。したがって、ことさらに直観のみを絶対視して偶像化すれば、東大寺の大仏と薬師寺の薬師像とのちがいもわからぬ、作品の同一性を弁きまえぬ認識の暗闇に堕ちかねない。美術史的認識は、そうした直観を偶像化する途をとらない。美的感動における直観は尊重されるべきだが、一挙にものを把握することのみにとらわれない。反省的思考はしりぞけられない。歴史的で相対的であることを、つねに弁きまえていなければならない。

さまざまな途をたどりつつ、美的感動をもたらす仏像、すなわち美術作品に接近していくことができる。成長し経験をかさねることでしか認識できぬ重大事は、いくらでもこの世に在る。仏像や美術品の制作は端的に、時間とともに習熟される途のあることを示している。造った日数と同じ日数をかけて見れば仏像はわかる、と語った高名な彫刻史家もいた。さらに、仏像に刻みこまれた過去の形をおもい見ようとすれば、見ることは何十年、何百年の行為となろう。時は美の審判者でもある。ほぼ以上のこと、時間をかけて見ることの意味が、彫刻史基礎資料にはじめて接してえた、奈良の貧書生の学術的感動の内容である。

今回鎌倉時代篇もまた同じみちをとるにちがいないが、万人が共通して理解できることばと論理とを以て、納入品、銘文、形状、法量、品質構造、保存状態とことわけて、仏像が語られるであろう。もっとも個人的体験の場とみなされる美術体験が、もっとも公的なことを体現することばで以て語られる。語るには、専門的な訓練と習熟が前提となるが、その前提にたってこそ、美的感動の基となる美術体験の、時代をこえた人間共通の自由な美術史的認識のみちははじまる。

彫刻史研究の新しい基礎を築く画期的事業

東京女子大学　名誉教授（中世文化史）　大隅和雄

奈良や京都の大寺院には、いくつもの堂舎が建ち並び、堂舎ごとに仏像が安置されている。堂舎の中には数々の仏像が安置され、他所から移されたものもあって、堂内に並ぶ仏像を見ていると、その寺院の歴史が浮かんでくるような気がする。地方のお寺の本堂にも、何体もの仏像があり、町や村の小さな仏堂に祀られている仏像、人々が日々礼拝を欠かさなかった持仏などなど、かつて人々は仏像に囲まれて暮らしていたのだと思う。

日本人は、人は神仏の姿や形を見ることはできないと信じていたので、目に見える仏像を造っても、その内部に小さな仏像や、発願者の信心を記した文書などを封じ込めて、見ることのできない像内納入物を拝んでいた。古い時代では、仏像を造ることができるのは、限られた人々であったが、中世に入って、仏に祈願することが盛んになると、庶民も仏像に近づくことが多くなった。鎌倉時代は、造像が最も盛んだった時代で、仏像を造り、仏前で祈念を凝らすことが、文化的な営みの中心の一つになった。時代の変動を潜り抜けて、現在に残る仏像はすべて、そうした文化を伝えるかけがえのない遺産なのである。

仏像彫刻は、古代に数々の名作を生み、日本美術史の巻頭を飾って、美術史の専門的な分野が立てられた。そのため、仏像が、専門的な研究分野の外に出て、文化史の広い視野の中で光を当てられることは少なく、美術史の専門的知識と、仏像に触れる技術を持たない者にとっては、容易に近づくことのできないものと考えられがちであった。

近年、歴史資料の悉皆調査が進む中で、仏像の調査に際して胎内銘、胎内文書が、つぎつぎに発見され、報告されるようになった。胎内納入資料に関する知識情報の量的蓄積が進むにつれて、胎内史料は、仏像の制作事情、年代などを伝える史料としてだけでなく、中世文化のあり方を多面的、かつ具体的に伝える貴重な史料だと考えられるようになった。今度、鎌倉時代の造像銘記が、前期分だけで六巻にまとめられ、刊行されることになった。近年、胎内文書は古文書集、地方史の史料篇にも積極的に採録されるようになったが、仏像をめぐるさまざまな問題を考えるためには、隔靴掻痒の感があり、総合的な集成の実現が待望されていた。文化史研究の新しい基礎を築く画期的な事業が始まると思うと、期待に胸膨らむ思いを禁じえない。

新たな学際的研究の大いなる基礎

東京大学大学院　人文社会系研究科教授（仏教学）　末木文美士

どのような分野でも歴史に関わるとき、信頼できる網羅的な資料集が刊行されているかどうかは、研究の進展の根本に関わる。それゆえ、その編集刊行は不可欠のことではあるが、それに関わる労力と時間は膨大なものであり、よほどの覚悟がなければ取り掛かることができない。『日本彫刻史基礎資料集成』も最初の刊行から三十年以上経ており、きわめて息の長い仕事であるが、倦まず弛まず作業を進め、平安時代篇に続く鎌倉時代篇の刊行に及んだことを喜ぶとともに、編纂者の努力に感歎の念を禁じえない。特に造像銘のあるものについては、美術史的な形状や法量の記述だけでなく、銘文の翻刻とそれをめぐる考察が含まれるので、研究上の応用範囲はきわめて広い。

日本の仏教史に関し、従来縦割りの研究体制で進められていたため、相互に他の分野でどのような研究がなされているか知らないことが多かった。仏教美術は当然ながらその背後に仏教的な教学や信仰、また歴史的背景があり、それらが関連しあっているのであるが、それぞれ別の分野で研究されてきたために、互いに重要なポイントを見落としたり、誤解したままで過ぎてきたところもしばしば見られた。私自身、これまで美術史の成果に十分な配慮を払ってきたかといわれると、それは美術史の専門家に任せるということにして逃げてしまい、忸怩たる思いを禁じえない。

それが、近年になって急速に学際的な研究が進展するようになってきた。すでに絵巻物などの絵画作品に関しては、美術史の独占ではなく、仏教史、ひいては一般の歴史史料として公認され、それを見ないと怠慢とされるまでになっている。仏教彫刻に関しては、銘文が史料として用いられることはあったが、まだ絵画ほどには学際的な研究の対象にはなっていないように思われる。しかし、胎内の文書や陀羅尼などを手がかりにして、仏像の形状などまで考察の対象に入れることができれば、当時の信仰を知る上で、新たな視角が開かれてくることが間違いない。鎌倉仏教に関しては、近年従来の常識的な見方が覆され、多様な信仰・思想が共存し、交渉しあっていたことが明らかにされつつある。本集成の鎌倉時代篇の刊行により、総合的に彫刻作品を見ることができるようになれば、新たな学際的研究の道が開かれるのではないかと期待される。その刊行を心待ちにする所似である。

日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代造像銘記篇　第一期　全六巻

第一巻収録作品

平成15年3月刊行

阿弥陀如来像、不動明王及び二童子像、
　毘沙門天像……静岡　願成就院
阿弥陀如来像……和歌山　高畑区文化財顕彰保存会
毘沙門天像……大分　永興寺
地蔵菩薩像……滋賀　櫟野寺
阿弥陀如来及び両脇侍像、不動明王像、
　毘沙門天像……神奈川　浄楽寺
弥勒菩薩像……アメリカ　ボストン美術館
不空羂索観音菩薩像、四天王像、
　法相六祖像……奈良　興福寺
弥勒菩薩像……京都　醍醐寺
薬師如来像……兵庫　達身寺
釈迦如来像……東京　大円寺
十一面観音菩薩像……山口　正法寺
阿弥陀如来像……京都　遣迎院
持国天像、多聞天像……長野　覚音寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……兵庫　浄土寺
阿弥陀如来像(伝釈迦如来像)……兵庫　慈眼寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……山梨　善光寺
維摩居士像……奈良　興福寺
弥勒仏像……香川　長命寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……埼玉　保寧寺
阿弥陀如来像……徳島　真楽寺
薬師如来像……神奈川　養命寺
弥勒菩薩像……奈良　東大寺中性院
釈迦如来像……京都　峰定寺
地蔵菩薩像……滋賀　福明寺
阿弥陀如来及び脇侍像……広島　耕三寺
　静岡　伊豆山浜生活協同組合
薬師如来像……広島　道隆寺
僧形八幡神像……奈良　東大寺
帝釈天像、梵天像……東京　根津美術館
　奈良　興福寺
薬王菩薩像、薬上菩薩像……奈良　興福寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……愛知　無量光院

第二巻収録作品

平成16年刊行

阿弥陀如来及び両脇侍像……長野　真光寺
不動明王像……京都　醍醐寺
金剛力士像……奈良　東大寺
文殊菩薩及び侍者像……奈良　文殊院
大日如来像……東京　東京芸術大学
大日如来像……滋賀　石山寺
盧舎那仏像頭部……三重　新大仏寺
阿弥陀如来像……京都　松尾寺
阿弥陀如来像……奈良　西方寺
阿弥陀如来像……和歌山　遍照光院
阿弥陀如来像……大阪　八葉蓮華寺
阿弥陀如来像……栃木　真教寺
阿弥陀如来像……奈良　安養寺
地蔵菩薩像……京都　如意寺
地蔵菩薩像……アメリカ　バークコレクション
孔雀明王像……和歌山　金剛峯寺
執金剛神像、深沙大将像……京都　金剛院
四天王像……和歌山　金剛峯寺
阿弥陀如来像……大阪　大円寺
地蔵菩薩像……奈良　東大寺
阿弥陀如来像……滋賀　西勝寺
聖観音菩薩像……福岡　杷木町
阿弥陀如来像……滋賀　善水寺
阿弥陀如来像……東京　個人蔵
十二神将像……奈良　興福寺
薬師如来像……石川　高爪神社
阿弥陀如来像……奈良　東大寺
地蔵菩薩像……福井　瑞伝寺
大日如来像……静岡　修禅寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……静岡　桑原区
阿弥陀如来像……広島　永寿寺
阿弥陀如来像……岡山　東寿院
不動明王像、毘沙門天像……滋賀　金剛輪寺
弥勒仏像、無著菩薩像、世親菩薩像……奈良　興福寺
空也上人像……京都　六波羅蜜寺
四天王像……滋賀　金剛輪寺
阿弥陀如来像……滋賀　玉桂寺

第三巻収録作品

平成17年刊行

不動明王像、毘沙門天像……高知　金林寺
観音菩薩像……滋賀　観音寺
釈迦如来像……京都　平等寺
阿弥陀如来像……北海道　天融寺
阿弥陀如来像……新潟　円福寺
薬師如来像……滋賀　源昌寺
竜灯鬼像、天灯鬼像……奈良　興福寺
観音菩薩像……滋賀　洞寿院
阿弥陀如来像……石川　尾添区
阿弥陀如来像……北海道　個人蔵
四天王像……奈良　円成寺
四天王像……京都　寂照院
十一面観音菩薩像……京都　万願寺
薬師如来像……栃木　上犬飼薬師堂
慈恵大師像……兵庫　現光寺
阿弥陀如来及び両脇侍像……岩手　光勝寺
阿弥陀如来像……京都　光薗院
菩薩像……新潟　観音堂
勢至菩薩像……熊本　高寺院
十大弟子像……京都　大報恩寺
阿弥陀如来像……宮城　阿弥陀寺
薬師如来像……神奈川　保木信徒会
十一面観音菩薩像……奈良　奈良国立博物館
阿弥陀如来像……三重　久昌寺
地蔵菩薩像……京都　清涼寺
阿弥陀如来像……奈良　光林寺
不動明王像……大塚稔旧蔵
不空羂索観音菩薩像……福岡　観世音寺
観音菩薩像……滋賀　仏心寺(矢取地蔵堂)
六観音菩薩像……京都　大報恩寺
毘沙門天像……東京　東京芸術大学
弥勒菩薩像……京都　高山寺
地蔵菩薩像……滋賀　仏心寺(矢取地蔵堂)
伝教大師像……滋賀　観音寺

以下続刊――毎年1巻ずつ刊行

彫刻史研究に新たな展望を開いた『日本彫刻史基礎資料集成平安時代篇』に続き、待望の『鎌倉時代 造像銘記篇』第1期刊行開始。鎌倉仏約370体の研究上必要な基礎データと多様な写真を掲載する、必携の資料集成。

創業50周年記念出版

日本彫刻史基礎資料集成
鎌倉時代造像銘記篇

［解説／図版］二分冊一函入

［第一期全六巻］の内
第一巻

定価（本体三三、〇〇〇円＋税）

●以下、毎年1巻ずつ刊行

本書の特色

◎造像銘記を有する鎌倉時代の仏像を集大成

本篇は、日本彫刻史を研究する上で最も基礎的な資料である造像銘記や像内納入品（願文、経文、木札、結縁交名等）によって、製作年時を特定できる彫刻作品を収録する。前書『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代造像銘記篇八巻、平安時代重要作品篇五巻に続く、鎌倉時代の彫刻作品の資料集成である。

◎第一期全六巻で約三七〇体を収録

刊行は二期に分かち、第一期刊行分六巻には文治元年（一一八五）から、仏師湛慶の歿した康元元年（一二五六）までに製作された仏像約二五〇件（約三七〇体）を収録する。

◎解説・図版の二分冊で構成

本篇各巻は図版と解説が対照しやすいよう、二冊からなる。図版は作品及び作品に付属する、当初からの光背、台座等に至るまで、多様で詳細な写真を収載し、解説では、それらについての基本的データや銘記の翻刻を載せる。

◎実地調査に基づいた精確な解説

作品解説は複数の編纂者による共同調査に基づくことを基本とする。解説執筆は、編纂者の他に、調査に直接携わった研究者がこれに当たり、銘記、納入品、形状、法量、品質構造、伝来、保存状態、備考を記述し、末尾に参考文献を掲げる。

［本書をお薦めする方々］

彫刻史研究者・研究室／美学美術史研究者・研究室／仏教及び仏教史研究者・研究室／中世史研究者・研究室／日本文化史研究者・研究室／美術館、博物館及び学芸員／古文書学研究者／大学・公共図書館／仏教各宗派寺院／古美術商／仏像彫刻家

●造本・体裁
A4判（縦297㎜×横210㎜）バクラム装上製本／貼函入／オフセット印刷／解説篇298頁／図版篇200頁／カラー写真7点／モノクロ写真524点

●定価（本体三三、〇〇〇円＋税）

●ISBN4-8055-1021-8 C3071

お取り扱いは——

中央公論美術出版

http://www.chukobi.co.jp

東京都中央区京橋2-8-7　読売中公ビル2階　〒104-0031

電話　03（3561）5993　FAX　03（3561）5834